大家族の長男

柿の種至上主義

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら長男でした。母親が保健所も真っ青な育児放棄で癇癪持ちです。その他色々ありますが弟や妹がまともに育つようなんとか頑張ってます。

目次

プロローグ ―― 1
思い出 ―― 10
決意 ―― 19
ロックス海賊団 ―― 23

プロローグ

そこは偉大なる航路(グランドライン)後半の海、通称〝新世界〟

その新世界において皇帝のごとく君臨する4人の大海賊〝四皇〟

そして四皇が1人、ビッグ・マムが女王として治める国の名を〝万国(トットランド)〟

現在、その万国の住民は強大な災害にみまわれていた。

「うわ――――――――――――!!!」

「キャ――――――――――――!!!!」

叫びと悲鳴が絶えることなく響き

「まさかこの場所で!!?」

建物のことごとくがガラスのように砕かれ、崩壊していく。

「ビッグ・マムの⊠癇癪(かんしゃく)⊠だァ――――!!」

「クロカンブ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッシュ!!!!!!」

万国の首都、スイートシティにて起こっている災害は、ビッグ・マムの〝食いわずらい〟

ビッグ・マムの『頭に浮かんだ食べたいものが食べられないと起こる』という言葉にすれば大したことはなさそうに思われるそれは、その場の存在にとっては命を脅かす大災害である。

国を治める女王が癇癪をおこし自ら国を破壊する。この状態のビッグ・マムにもはや理性はなく見境なくあらゆる物を破壊、食しながら怪獣の如く暴れまわるのであった。

今回の目当ての食べ物(クロカンブッシュ)は、総料理長らの頑固なこだわりから未だ製作段階にすらなく首都崩壊が現実味を帯びてきていた。

暴走状態のビッグ・マムは正気ではない。己の邪魔をする存在は何であれ、誰であれ容赦しない。

それは実の子どもであっても一切の例外はない。

「止めてくれママ!!俺だよ!あんたの息子のモスカートだよ!」

「モスカート!落ち着け!臆したら寿命を取られるファ!!」

「モスカート兄さん!!!」

身体からにじみ出した寿命にビッグ・マムの手がかかり、島の住民もモスカートの兄妹たちもこれから起こる光景に目を背けようとしたその瞬間、両者の間に何かが飛来し辺りは煙に包まれた。

「なんだっ!!??」

「何かが降って来たぞ!!」

「どうなったんだっ!!??」

徐々に晴れていく土煙から出てきたのは、先の衝撃でやや吹き飛ばされたモスカート。そして彼をかばうようにビッグ・マムと拮抗している巨漢。

「俺の大事な弟に手を出すんじゃねえよ!!!!」

その巨漢の姿と声に、誰もが安堵する。今しがた命を救われたモスカートが叫んだ。

「ありがとう!!!パパァ!!!!!」

「パパと呼ぶんじゃねえ!!」

ビッグ・マムと遜色ない巨体の漢は、ビッグ・マム海賊団スイート3将星が一人・シャーロット家長男　名をシャーロット・カタクリ。

♦♦♦♦

「俺の邪魔をする奴は、誰であろうと許さねえ!!」

ビッグ・マムがさらに力をこめてカタクリを押し返そうとする。正気でないとはいえ四皇が一人。純粋な力は巨人族すら凌駕するビッグ・マムの一歩は局所的な地震を引き起こし島民の悲鳴が響く。

「っ!!!カタギに迷惑かけんじゃねえ!!〝とちモチ〟!!!」

カタクリの踏み込んだ足を起点に地面が波打ち、舗装されたレンガの道が真っ白なモチへと変化していく。そこから更にカタクリは逆の足で一歩踏み込んだ。対抗して足に力をこめようとするビッグ・マムだが踏ん張りの利かない地面でどんどん押されていく。足元を見れば、焼く前の餅のように固くツルツルして思うように踏ん張れなかった。一方のカタクリはモチの粘りを足の接地部分だけに発揮させ強固な足場を形成し加速していく。

「おおおおおおおおおお!!!!」
「あのビッグ・マムの巨体をっ!!」
「流石カタクリ兄さんだ!!ママを押し切っていくなんて!!」

雄たけびを上げビッグ・マムを押していったカタクリによって場は首都から離れた平原まで移動していた。

♦♦♦

「俺の邪魔をするなァッ!!!」

「大人しく菓子を待ってろ!!!」

ガードの踏ん張りで地面にひびが入り、衝突の衝撃波で空の雲が押されていく。
ビッグ・マムは正気でないため彼女の分身であり武器と言える、「雷雲」〝ゼウス〟「太陽」〝プロメテウス〟は遠巻きに戦いを見ているにとどまり無手。カタクリも愛用の武器を使わず無手であり、覇気を含めた純粋な戦闘が繰り広げられていた。
覇気を纏った拳がぶつかり、金属同士がぶつかり合うような重厚な音が響く戦闘だが始まってから未だ一度も〝覇王色の激突〟は起こっていなかった。
「新世界広しといえど、あのママの攻撃を一歩も動かずに受け流せるのはカタクリ兄さんしかいねえぜ・・」

遠巻きに戦闘を見ていたモンドールの呟きに異論をはさむ者は誰一人いない。
〝鉄の風船〟と称される生まれつき強靭な肉体をもつビッグ・マムはすべてが規格外。たとえ彼女の子どもが全員で挑んだところで勝ち目は万に一つない。
その強靭な肉体から放たれる攻撃はスイート3将星に数えられ、強固な防御力をほこるクラッカーのビスケット兵ですら一撃で砕かれる。
普通、誰も災害に立ち向かおうなどと考えない。通り過ぎるか治まるのを待つソレ

を、

「俺が行かなくて誰が行くんだ」

そう言って弟や妹、ひいては島の住民を守ろうと立ち向かう兄の姿に憧憬を抱かずにはいられなかった。

ビッグ・マムの攻撃を防ぎ、受け流し、紙一重で避ける。何度も立ち向かって重傷を負っていた万国建国当初とは大違いだった。

当時はみんなで重傷の兄を泣きそうになりながら治療していたし、小さい弟や妹は大泣きしていた。こっちの気も知らずに、起きた兄は短くも心のこもった感謝をしてすぐに小さな弟や妹のあやしと事後処理を一人でやろうとして大喧嘩になったことも一度や二度ではない。

それでも果敢に挑み続け無傷で乗り切るようになって「もう大丈夫だ、心配するな」と的外れな言葉に、兄弟みんなで怒った記憶も懐かしい。

先頭で戦う姿も、弟や妹たち全員一切の例外なくママの代わりに世話をしてきた育て親であることもあって本人は頑なに否定するが「父親（パパ）」だと誰もが思っていた。

ビッグ・マム海賊団スイート3将星・シャーロット家長男
《大父（ビッグ・ダディ）》 シャーロット・カタクリ　懸賞金　10億5700万ベリー

思い出

シャーロット家３５女　シャーロット・プリンはジェルマ６６　ヴィンスモーク家三男のヴィンスモーク・サンジとの結婚式の前夜、懐かしい夢を見ていた。
昔の自分を第三者の視点で眺めることしかできない、なんとも歯がゆい夢。
それはまだ自分が小さく、カタクリ兄さんを本当の父親だと思い込んでいた頃。そして、まだ自分が無力で何もできなかった頃。

「見ろよこいつ三つ目なんだ!!!」「キャ～～～～～～～～～～～～～～!!!」「お化けだ～～～～～～～～!!!」「怪物だ!!!」「気持ち悪い!!!」
『我が子ながら気味が悪いね。前髪を伸ばしな!!!』

年の近かったガキにいいようにされ、周りから散々言われる中で自分はただ泣くことしかできなかった。泣けばいじめっ子の思い通りだと分かっていたのに、周りの人間の

言葉が、ママの言葉を思い出させてどうしても涙が止まらなかった。
この時が、自分は醜い三つ目の化け物なんだと初めて思わされた時でもあったのだ。
傍観者にしかなれない自分はガキどもを蹴散らすことも、目の前の弱者を叱咤することもできない。それでも自分はもうすぐ助けにとんできてくれる人がいることを知っている。

「うちの大事な妹になにしやがる!!!」

滅多に見せない恐ろしい怒りの形相でやってきた兄さんにみんな蜘蛛の子を散らした様に逃げていく。カタクリ兄さんは逃げていった奴らをほっといてまだ泣いている私を慰めてくれた。いつだってカタクリ兄さんは私たち妹や弟のことを何よりも優先し、大事にしてくれる。
次男のペロスペロー兄さんがママの代わりに代表として来賓の相手をできるようになるまでなんて、赤ん坊の弟や妹をあやすために来賓を待たせるなんてことが頻繁にあったのだと兄さんや姉さんが苦笑しつつも、嬉しさを隠しきれない、そんな顔で話してくれたのを思い出した。
未だに泣き止まない私の途切れ途切れの言葉から状況を聞いたカタクリ兄さんは、自

分の顔をよく見るように言ってきた。涙をぬぐいその先に見たカタクリ兄さんの顔の驚きは今でも鮮明に憶えている。

普段は傷ひとつない顔に、耳まで裂けその両端を縫い合わせた口があったことに小さい頃の私は絶句してしまった。驚いて何も言えない私にカタクリ兄さんはゆっくりと丁寧に話してくれた。

「たしか・・・クラッカーだったか・・あいつは小さい頃から痛いのが嫌でな、転んで擦りむいたりするとよく泣いてた。赤ん坊の頃なんかちょっと目を離した隙に横になろうとして頭をぶつけては泣いてたのをよく憶えてる。――――――泣き虫なあいつに、この口は怖かったんだろう」

顔見る度に泣かれちゃ敵わんから見えんようにしたんだ、なんて大したことないように言うカタクリ兄さんに私は嫉妬した。自分の変なところを、周りの人間と違うところを隠せることに。

次に私は期待した。カタクリ兄さんがそうしていた様に、私の目も隠してくれるかもしれないと。

だけど、そう考えお願いしようとする前にカタクリ兄さんが口を開いた。膝をついて目線を合わせ、幼い私に言い聞かせるように

「たしかに俺がやれば三つ目は隠せる。けどそれは本当のプリンを隠すってことだ。ある人の言葉だがな、『みんな違ってみんないい』。俺はその通りだと思ってる。俺はプリンの見た目が変だなんて一度も思ったことはない。周りの人間の言葉なんか気にするな、お前のママの言葉なんか気にするな。言わせとけばいいんだ」

「――――――いつかきっと、ありのままのお前を好きになってくれる奴が現れるさ」

嬉しかった。自分を気味悪がらない人がいてくれて。

涙がまた出てきた。だけど全然つらくなかった。

私に向けてくれる暖かい瞳が大好きになった。

「ば、化け物だ～～～～!!」

それまでのいい気分を台無しにする、ついさっきまで聞いていたガキの大声が響いた。見れば、さっき散り散りになったガキ共が戻ってきてこちらを見ていた。

いやに響くのはさっきまで散々言われた言葉。だけどその言葉が指す相手は私じゃなかった。

「キャ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」「口が耳まで裂けてる!!!」「お化けだ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」「怪物だ!!!」「気持ち悪い!!!」

私のために見せてくれていた本当の口を見て、叫んだり気味悪がったり罵ったりする。

自分が言われるのと同じかそれ以上につらかった、苦しかった。私のせいで隠していたのがばれてしまったと思ったらなおさらに。

そんな私に、カタクリ兄さんは笑顔を見せて周りで騒いでる奴らに向き直った。

「これが俺だ!!!文句あるやつはいるか!!??」

口の両端を縫っていた糸を強引にちぎり、大口をあけて威嚇するように叫んでいた。

「キャ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」「逃げろ〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」「喰われる〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」「化け物だ〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」

「お前らの言うその化け物に喧嘩売ったんだ。わかってんだろうな!!!」

騒ぐ奴らをおっぱらった後、これからは変相しなくて済むから清々したな、なんて笑うカタクリ兄さんに私はなんて言えばいいか分からなかった。

翌日、私は自分をいじめてきたガキ共のたまり場に一人で行き、全員のカタクリ兄さんとついでに私の記憶を消してやった。そこからは子どもも大人も関係ない、真実を知るやつは全員だ。理由はシンプルだった。耐えられなかったからだ。本当のカタクリ兄さんの顔を見て泣いたり、引いたり、怖いと口にする、まだかなり幼かった弟や妹の姿も、それをあやしつつも怖がらせてしまう自分の口の形を申し訳なさそうにするカタクリ兄さんの姿も見続けられなかった。

まだ手に入れたばかりのメモメモの実の能力を何度も使うのはつらかったけど、自分のせいだし何より大好きなカタクリ兄さんがあんな風に見られるのが嫌だったその一心でやりきった。

私は前髪を伸ばして第三の目は隠れているし、カタクリ兄さんの口もどこも変なところはない。真実を知るのは私より上の兄さんや姉さんだけ。

この今見ている夢の出来事は、カタクリ兄さんとの部分だけ大切に憶えている。ガキ共なんてどうでもいい、記憶する価値などない。

ただ、カタクリ兄さんの言葉の他に、頑張って記憶を消してきたことを報告した時のカタクリ兄さんの表情はなぜかとても記憶に残っている。

◆◆◆◆

長い夢から覚めて傍付きに手伝ってもらってウエディングドレスを着て、時間まで待っているとタキシードに身を包んだカタクリ兄さんがやってきた。

「おはよう。昨夜はよく眠れたか？体調は悪くないか？何か不安だったりしないか？」

結婚式当日でも変わらずすぐにこちらの心配をしてくるのはカタクリ兄さんらしかった。

「大丈夫よ兄さん、気にかけてくれるのは嬉しいけど心配し過ぎよ」

「それもそうか、それにしてもよく似合っているぞ。とても綺麗だ」

「もう！兄さんは何回も見てるでしょう」

今着ているウエディングドレスはカタクリ兄さんと二人で選んだものだった。

弟も妹も、これまで結婚した家族全員の結婚式の準備にカタクリ兄さんは参加していた。妹ならウエディングドレス選びを、弟なら結婚式の予定や余興の相談を、自分の結婚式の様に張り切ってそれでいて嬉しそうに態々予定を空けて一緒になってしてくれる。そして、その弟や妹の希望を第一にしてくれる。これまで結婚した兄さんや姉さんが嬉しそうに話してくれていた。

そしてカタクリ兄さんは今回の結婚式の新婦である私と、これまでの姉さんたちと同じように、バージンロードを歩く新婦の父親役をする。この役は誰にも譲らないし、私

もカタクリ兄さんじゃなきゃ嫌だった。
本来なら5メートルある兄さんは、私の歩幅に合わせるために体格を私と大差ない変化させてくれる。
ママの癇癪に対抗できるように、って言う理由もあったがそれ以上に人を見下ろしてしまうことを嫌ったカタクリ兄さんの〝造形（シフト）〟。日常的に使用してさりげなく相手の目線に合わせてくれる、そんな気遣いができるところも家族みんなから好かれる理由なんだろうな、なんてとりとめもないことが頭に浮かんだ。

「もうすぐ時間だ」
「ええ、行きましょうお父さん♬」
「だからそう呼ぶなと何度も言ってるだろう・・・」

悩まし気にため息をつくカタクリ兄さんに私は申し訳なくなる。

「たしかに私に血の繋がった父親がいるのは分かるけど、育ててくれたお父さんはカタクリ兄さんよ」
「そしたら俺は未婚で子持ちになるだろう・・」

「カタクリ兄さんのお嫁さんは私たち全員が認めなきゃ許さないわ♪」
「それは実質絶対にＯＫしねえってことだろう・・」

結婚式でのジェルマ主要幹部の殺害と乗っ取り。私が隠し持った銃で新郎を撃ち殺すこと。これらの計画すべてを、

「だってカタクリ兄さんは、私たちの大好きなお兄ちゃんだもの♬」

カタクリ兄さんだけがなにも知らない。

決意

目が覚めて、最初に感じたのは潮の香りと船内特有の揺れ。
まるで自分の体ではないかのように思い通りに動かせない中、何とか体を起こし周りと、改めて自分を見る。
周りがこちらを見て騒いでる中で、赤子のような自分の手を見つめ・・・
――――――どうやら俗に言う転生、生まれ変わりをしたらしい

どこか他人事のように考える己がいた。

生まれ変わって数日で五感は正常に働き、外界の情報が入ってくるようになってきた。どうやらこの船は海賊船で、俺の母にあたる女もまた海賊らしい。それも実力、悪名ともに指折りの。
大のお菓子好きらしく、子どもがそのまま大人になってしまった。そんな印象を受け

る人だった。美しいピンクの長髪を持ったまさしく女海賊といった見た目は、一般教養の他になぜか今生まで付属してきた二次元の記憶でいけば騎兵（ライダークラス）のアガルタのダユーが近いかもしれない。もっとも断然ドレイク派であるが

１８で俺を生（子ども）んだことは少しの驚きはあったにせよ、本人が選んだことなので子である俺がそこに意見を入れる余地はない。ただ生んでもらったことに、第二の人生を授けてくれたことに感謝するだけだ。一歳にも満たない俺を四苦八苦しながら育てようとしてくれていることも感謝しかない。「マザーがしてたことはやっぱり凄かったんだね～♬」というのが口癖になっていた。口が耳まで裂け目覚めてすぐ泣きもせずに起き上がり周囲を見回す赤子など、我ながら不気味なことこの上ないが「流石は俺の息子だっ!!」などと笑う母は肝が据わっているとしか言いようがない。

だけれども一つだけ言わせてもらいたいのだが・・・

二人目を作ろうとするのが早過ぎやしないだろうか？

第一子誕生（俺が）してからまだ半年くらいしか経っていないのにもう二人目か。体に負担がかかるだろう。しかも相手は俺の父親（おそらく）ではない男（別の）。離婚か死別か・・・それにしたって早すぎるだろう。もう少し節度あるお付き合いをした上での方がいいと思うのだ

が・・・・。

転生前の人生含めると普通に彼女より年上になるせいか変な立ち位置の思考になってしまった・・・

第二の人生、誕生からおよそ一年。一つ違いの妹ができました。

だけど家族の人数はプラスマイナス０です。そして同時に俺はある決意をした。

子が生まれれば父親は用済み、血の繋がりもない赤の他人だと言い切った彼女の言葉に絶句する他なかった。俺と同じように絶句し激昂した男をその場で何てことない様に殺した女に妹を任せておけない。この調子で増えるであろう未来の弟や妹も。俺のいる籠を揺らしつつ一部始終をニタニタと笑みを浮かべながら眺めるこの小柄な男も同様に任せられるわけがなかった。

隣で産声をあげる、俺にとって初めての妹。第二の生だからとか関係なく妹を愛おしく感じていた俺の耳に入って来た言葉は今でも信じられない。

「なんだい、カタクリと違って使えなさそうね」

子はどうあれ、親を見て育つ。親の影響は大きく、大切だ。未来の弟や妹が同じようなことをしかねないと思うと恐ろしくさえあった。

子は、生まれる場所を親を選ぶことはできない。だが新たな命として生まれたことを祝福される、愛される権利があるはずだ。繰り返されるであろう父親の不在、その分まで祝福と愛情を。

いたずらに命が失われていくこの船で
小さな命を守る存在に俺はなる。

ロックス海賊団

ロックス海賊団
ロックス（本名　ロックス・D・ジーベック）を船長とし、後の世で四皇と称される
〝白ひげ〟エドワード・ニューゲート
〝ビッグ・マム〟シャーロット・リンリン
百獣のカイドウ
海賊たちの象徴とも言える〝海賊王〟ゴール・D・ロジャーと伝説的な戦い『エッド・ウォーの海戦』を繰り広げることとなるのちの〝海賊艦隊提督〟金獅子のシキ
その他、〝銀斧〟〝キャプテン・ジョン〟〝王直〟など名だたる大海賊たちが一船員として在籍した伝説的海賊団。

数十年後、元海軍元帥センゴクに
「〝海賊島ハチノス〟にて、一つの儲け話の為にかき集められ生まれた個性の集団」
「船内でも〝仲間殺し〟も絶えない凶暴な一味だった」
と言わしめる海賊団には、その巨大すぎる海賊達の影にいながら皆に一目置かれる子

どもがいた。

夜も更け、常であれば見張り番以外は床に就き静寂が訪れるはずの甲板には人だかりとその中心で戦う2人の姿がある。

６ｍを超える巨体とそれを上回る大きさの長刀を振るう、三日月型の大きな白い口ひげの巨漢。

ロックス海賊団　船員　〝白ひげ〟エドワード・ニューゲート

対するはその白ひげの膝まですら及ばない体躯で、その身に不釣り合いな三叉槍を手に戦う未だ齢二桁に満たない男児

ロックス海賊団　船員　シャーロット・リンリンの長子　シャーロット・カタクリ

「どうしたカタクリ！」「息があがってんぞ！」　「さっさと代われぇ!!」「ギャハハハハハハ」「ジハハハハ」　「根性みせろやァ!!」　「やれぇ白ひげェ！」

「前よか時間かかってんぞぉ！」

酒瓶片手に野次を飛ばす船員たちの前で繰り広げられる戦いの優劣は誰の目にも明らかなものだった。

地を這うように低く素早く移動するカタクリが繰り出す刺突や斬撃を、白ひげはすべて防ぎ時折反撃を行う。

言葉にすればなんてことはなさそうなのに、カタクリにとっては白ひげの反撃は速い・鋭い・隙が無いの三拍子が揃った一発ＫＯパンチのため全神経を集中させており息が上がってしまいそうだった。

「グララララ、その程度かハナタレ小僧ォ!!!」

「ガキだからって甘くみてんじゃねえ!!」

自分自身に喝を入れる様に吼えながら向かってきたカタクリに迎撃の構えを取ろうとして、「むぎゅ」と戦闘に似つかわしくない音が足元から聞こえた。

見れば踏み込んだ片足に白く弾力と粘りのあるナニカが纏わりつき、踏み込みが利かない。

千載一遇とも言える好機に沸き立つ野次馬を黙らせるように、白ひげは甲板を踏んだ。

床を突き破らず、それでいて船全体を大きく揺らすグラグラの実の力で体勢を崩した

カタクリを床に沈めることでその日の戦闘形式の訓練（いつもの日課）は幕を閉じた。

◆◆◆◆

「今日こそは一本くらい取れると思っていたが……」
「グララララ、まだまだよ」
　日課を終えて、船のわきで酒を片手に行う反省会もどきの時間が白ひげは中々に気に入っていた。「酒臭さが残ると妹たちによくない」と水と果物で済ます隣の相手くらいがちょっとした不満くらいであったが、まあ無理に飲ませても楽しいものでもなし。そう思いつつ杯を傾ける。
「最後のアレ、ありゃぁ悪くない一手だった」
「そうか」
「あんな猪口才な手、いつ仕込んだ」
「何度目だったか距離をあけた時に切り離した。そこからは大きく外回りから背後まで」
「中々変わってやがるなぁ、お前の超人系（パラミシア）は」
「グラグラの実の能力者（あんたでもない）が言うな。

だが時間がかなりかかっていたのも事実、この程度じゃ足りん」
「ギハハハハハ!!その年で白ひげに能力使わせたんだ!!ドンと胸張れェ」
「ッ?!見聞色をさも普通にかいくぐらないでくれ船長……」
珍しくその場に現れたのは、酒瓶を片手に逆立った髪と凶悪な笑みを浮かべた男
ロックス海賊団　船長　ロックス・D・ジーベック
来訪を察知できなかったことにカタクリは未熟さを痛感し、更なる鍛錬を胸に手元の水を飲みほした。
「ギハハハハハ!!まだ上は高いがよく鍛えられてる！次の段階に至るのもそう先の話じゃねえさ、なあ白ひげ」
「そこに届かねえなら、このおれから一本取るのは夢のまた夢だな」
「俺がやった⊠土竜⊠の使い方もだいぶ様になってきてるぜェ。」
「見てやがったのか」
「俺が行ったら白けちまうだろぉがァ」
酒の入った大人が二人。話が長くならない筈もなく、妹弟のこともあり席を外そうとしたカタクリをロックスは引き留めた。
「今日はおめェに言っておきたいことがあって来たんだ」
「……なんだ船長」

先の姿とは打って変わった真剣な雰囲気に、カタクリは居住まいを正し白ひげは口を閉じた。
「いいかァ、この世の中ってのはクソだ」
「たとえ１００人中９９人が咽び泣いて改心するような聖人の話を、１人の気に入らねえって感じた強者が踏みにじって殺し尽くす。この世はそんなクソッタレがまかり通るのさァ」
「金も、権力も、兵力も全部持ってやがる〝天竜人〟とか名乗ってる猿が、今このクソの一番上でのさばってんのさァ」
「クソ山の猿どもが力を好きに振りかざすこの世がクソじゃなかったら何だってんだァ!!」
およそまだ年端もいかない少年に聞かせる話ではないが、そこに口を挟む場違い者は存在せず、
またロックスのそれは一切の介入を許さない熱を持つものだった。
「そのクソの中で己(てめぇ)の筋を通すのに唯一必要なのが力だ!!」
「己(てめぇ)自身の強さ(力)!!」
「俺様はこの世の誰も逃げられねェ唯一絶対の力(法)で

世界をひっくり返してやるのさ!!!」

彼は後に語るだろう。
始まりは其処だったのだ。
それは余りに衝撃的で、少年の根底に焼き付く程の――――。

何もかもを呑み込み、焼き尽くさんとする炎を奥に秘めた眼と変わらず凶悪な笑みを浮かべた顔を少年に向ける。

「――――これが俺様がお前に残せる一かけら(ワンピース)の思想だ」

原点

コン、コン、コン、コン、と扉を叩く小気味よい音で部屋の主は仮眠から目覚める。
壁の装飾から椅子に至るまで城主の異常な菓子好き(趣味・趣向)が反映されたものとは異なり、この部屋は質素ながら落ち着きのある一般的な家具が置かれ、執務室と表現すべき様相だった。

黒いコートと上着、そして一本の三叉槍が壁に掛けられた部屋。
黒を基調とした服の、物静かな大人。
「おはようございます！朝食の準備は済んでおります！その後、本日の宰務の内容のご確認を！」
「分かった。毎朝感謝する。」
「こんなことご恩に比べればなんでもありません！副国王様！」
「――――その呼び方は好きじゃない」

ビッグ・マム海賊団シャーロット家長男　スイート三将星兼、世界政府加盟国万国（トットランド）宰相兼副国王　シャーロット・カタクリ